薩摩塔小考

高津 孝・橋口 亘

1. はじめに

鹿児島県・長崎県・福岡県等に分布する薩摩塔は、その独特の形態や製作地・製作年代等が不明な謎の多い石塔である。本稿ではこの薩摩塔について、鹿児島県内の資料を中心にその来歴・研究史について触れ、また薩摩塔の産地等についても若干の考察を加えてみたい。

2. 鹿児島県内分布の薩摩塔の来歴

薩摩塔の分布上の特色としては、九州島西部を中心としていることが明らかである。鹿児島県内では、下記の5ヵ所に現存している。

(1) 南九州市川辺町水元神社現存の薩摩塔（写真A・B）

付近の運朝寺跡から発見されたものと伝えられている（川辺町郷土史編集委員会 1976）。しかし、昭和36年11月20日の『毎日新聞』鹿児島版の記事（毎日新聞社 1961）や、昭和39年に川辺町教育委員会が発行した文化財調査報告書『清水磨崖仏群』（川辺町教育委員会 1964）の文章中などでは、なぜか「運朝寺跡から発見」という点については触れられていない。南九州市の市指定文化財（旧川辺町の町指定文化財）である。

(2) 南九州市川辺町神殿現存の薩摩塔（写真C）

層塔の上に重ねられている状態で、虎御前供養塔として祀られている。層塔の上に薩摩塔が重ねられた状態となっている理由については詳細不明。昭和36年1月1日の『広報かわなべ』1月号（第39号）の記事（川辺町役場 1961）や、同年2月3日の『南日本新聞』の記事（南日本新聞社 1961）などでも紹介されている。南九州市の市指定文化財（旧川辺町の町指定文化財）である。

(3) 南九州市川辺町諏訪運動公園現存の薩摩塔（写真D）

川辺町清水の宝光院跡から発見されたものと伝えられ、昭和36年11月20日の『毎日新聞』鹿児島版の記事（毎日新聞社 1961）などでも紹介されている。南九州市の市指定文化財（旧川辺町の町指定文化財）である。

(4) 南さつま市坊津町坊津歴史資料センター輝津館現存の薩摩塔（写真F）

もと坊津一乗院にあったものと伝えられている。昭和44年の『町報ぼうのつ』12月号（第162号）の記事には「もと一乗院の庭にあったものを鹿児島市の永田千秋氏が買いうけていたが、昭和二十七年氏が大阪へ転出の際、坊津町へ寄贈されたものである。」と説明されている（坊津町役場 1969）。永田氏から坊津町へ薩摩塔が渡される際、交渉にあたった佐藤順二氏の話によれば、「もと一乗院の庭にあったもの」という点については、交渉の際に永田氏から説明されたという。しかし、

当該薩摩塔を永田氏が「買いうけていた」という話の詳細は不明であり、『坊津町郷土誌』上巻にみられる「地元地主から買受けていた」（坊津町郷土誌編纂委員会 1969）という記述についても、今回の調査ではその詳細解明に至らなかった。佐藤氏への聞き取り調査により、当該薩摩塔が永田氏から坊津町へ渡されたという点については、ほぼ確実視される。しかし、永田氏が所持していた薩摩塔が、もと一乗院に所在したという点などについては、現時点では伝承の域を出ないと言えよう。なお、佐藤氏によれば、永田氏は川辺に縁者を持つ古物商であった可能性があるという。南さつま市の市指定文化財（旧坊津町の町指定文化財）である。

(5) 霧島市隼人町沢家墓地現存の薩摩塔（写真E）

霧島市隼人町の沢家墓地の墓石群中に、残欠の状態で現存している。沢家墓地との関連は不明。昭和 49 年、黒田清光氏によって「最近発見」として記述されており（黒田 1974）、坊津や川辺の薩摩塔よりも後に発見されたと考えられる。

3.「薩摩塔」の命名と初期研究

「薩摩塔」の名称について、黒田清光氏は「昭和三十八年京都の斉藤彦松教授が、薩摩の梵字資料調査のため川辺町清水磨崖を視察された際、水元神社境内にある石塔と公民館に保存されている残欠石塔で川辺町に三基、坊ノ津町に一基ある石塔が、薩摩独特のものであるところから薩摩塔と命名されたものです。」と記している（黒田 1974）。しかし、「薩摩塔」の名称については、すでに昭和 36 年 11 月 20 日の『毎日新聞』鹿児島版の記事（毎日新聞社 1961）にその名が見え、上記した薩摩塔の昭和 38 年命名説が明らかな誤りであることがわかる。

では、薩摩塔の命名時期はいつ頃までさかのぼるのか。南九州市教育委員会所蔵の公式資料によれば、川辺で 3 件確認されている薩摩塔の町文化財指定年月日は、ともに昭和 33 年 6 月 6 日とされている（昭和 53 年『川辺町教育委員会告示』第 9 号ほか）。

ところが、上記した昭和 36 年 11 月 20 日の『毎日新聞』鹿児島版の記事（毎日新聞社 1961）は、「“薩摩塔”の名で町文化財に　川辺町の三つの特殊仏塔」というタイトルで、「川辺町の三つの特殊仏塔」について、「坊津町一乗院跡の仏塔と同一形式のもの。京都大谷大学の斎藤彦松教授はこれら三つの塔を“薩摩塔”と名づけ、仏教美術上、貴重な資料として保存することを町教委にすすめており、同教委でも町文化財指定の準備をすすめている。」と記している。

また、昭和 34 年に川辺町教育委員会が作成した『清水磨崖佛文化財指定申請書類』（川辺町教育委員会 1959）や、昭和 39 年に川辺町教育委員会が発行した文化財調査報告書『清水磨崖仏群』（川辺町教育委員会 1964）に記された樺山寛氏の「序文」と齋藤彦松氏の「緒言」をみると、齋藤彦松氏が初めて川辺町清水を訪れたのは昭和 33 年 7 月 10 日と考えられ、問題の昭和 33 年 6 月 6 日は、齋藤彦松氏が未だ清水磨崖仏すらも視察していない時期だということがわかる。

南九州市教育委員会が所蔵する当時の資料の一つ、齋藤彦松氏の調査メモノート『造形史学手記』第十九冊（齋藤 1958）には、昭和 33 年 7 月 10 日の川辺調査、同 11 日の坊津調査時のものと思われるメモ書きがみられる。昭和 33 年 7 月 10 日の川辺調査のメモ書き部分には、川辺の薩摩塔についての記述は登場しないが、昭和 33 年 7 月 11 日の坊津調査のメモ書き部分（昭和 33 年 7 月 10 日付の川辺調査の次ページ）には、坊津の薩摩塔のラフスケッチが描かれている（写真G）。すでに昭和 33 年 7 月 11 日時点で、齋藤彦松氏が坊津の薩摩塔について注目し、法量データ等の調査を行う対象とした

ことがわかるが、ラフスケッチの周囲には「薩摩塔」の用語は記されていない。また、同じく南九州市教育委員会が所蔵する齋藤氏のネガフィルム整理帳『ネガ』№3 には、当該調査時のものとみられる坊津の薩摩塔の写真フィルムが収められているが、ここにも「薩摩塔」の記載はなく、かわりに「坊ノ津特殊塔」との記載がみられる（写真H）。

このほか、南九州市教育委員会が所蔵する齋藤氏のネガフィルム整理帳『ネガ』第 4 冊には、昭和 34 年 3 月の川辺調査時のものと推測される、川辺町宝光院跡の薩摩塔（同町諏訪公園現存）の写真フィルムが収められており、ここにも「薩摩塔」の記載はない。また、この齋藤氏のネガフィルム整理帳『ネガ』第 4 冊には、撮影時期は直接的には不明であるが、川辺町水元神社の薩摩塔（整備前の状況）と、川辺町神殿の薩摩塔（虎御前供養塔）の写真フィルムが収められているページがあり、水元神社の薩摩塔の写真フィルムが収められている部分には、「薩摩塔」の文字が記されている。さらに、南九州市教育委員会が所蔵する齋藤彦松氏の『薩摩塔資料集』（齋藤 1986）には、「S. 35. 10. 29」や「昭和卅五年拾月廿九日」の日付が入った、川辺町水元神社の薩摩塔（整備前の状況）の写真と、川辺町神殿の薩摩塔（虎御前供養塔）の写真が貼付されている。前述した、齋藤氏のネガフィルム整理帳『ネガ』第 4 冊に残る「薩摩塔」の文字が記入された時期が、昭和 35 年頃にさかのぼるか否かについては、今後の検討課題である。

一方、刊行物としては、「これも貴重な文化財－神殿虎御前の墓－」と題された、昭和 36 年 1 月 1 日の『広報かわなべ』1 月号（第 39 号）の記事（川辺町役場 1961）では、川辺町神殿の薩摩塔（虎御前供養塔）が紹介されているが、「薩摩塔」の語は用いられていない。また、「川辺町虎御前の墓　貴重な文化財として調査」と題された、昭和 36 年 2 月 3 日の『南日本新聞』記事（南日本新聞社 1961）にも、「薩摩塔」の語は用いられず、かわりに「特殊仏塔」という言葉が使用され、「町教委は考古学の京都大谷大斎藤教授に資料をおくって鑑定を依頼したが、国内にも類例のない貴重な特殊仏塔であるとの回答があったので墓地の整地を行ない、保存することになった。」と記されている。

上記のように、昭和 36 年 11 月 20 日の『毎日新聞』鹿児島版の記事には、齋藤彦松氏が「特殊仏塔」を「薩摩塔」と名付けたという説明がみられ、この記事が今回確認できた諸刊行物中での「薩摩塔」の名の初見であり、昭和 37 年に至ると、複数の資料上で「薩摩塔」（「さつま塔」）の名が確認できようになる（南日本新聞社 1962、鹿児島新報社 1962、川越 1962、坊津町教育委員会 1962）。

以上のようなことから、薩摩塔の命名者は齋藤彦松氏で、少なくとも昭和 36 年にはその名が一般に認知されるようになったと考えたい。結局、その命名後に薩摩塔は薩摩以外でも確認されることになる（黒田 1974、多田隈 1975 ほか）。

また、その命名以前は薩摩塔が「特殊仏塔」等の名で呼ばれていたこと、齋藤彦松氏による薩摩塔の調査は、少なくとも昭和 33 年 7 月 11 日の坊津薩摩塔の調査時までさかのぼることなども確認できたが、初期の薩摩塔研究の実態については未だ不明な点が多く、今後の資料の増加が待たれる。

4. 薩摩塔の産地

薩摩塔に使用される石材は、鹿児島・長崎等それぞれの薩摩塔分布地において、周辺に類を見ない特殊な石材とされ、それゆえ他地域からの搬入品である可能性が指摘されてきた。

長崎では、大石一久氏が「石材からみて長崎県内での製作は考えられず、平戸島などの薩摩塔は他の地域からの搬入塔であることは明らかである。したがって現在の段階では薩摩地方での製作が一番有力であるが、平戸島の二ヵ所（志々伎山、館山）で薩摩塔と一緒に中国式様式をもった笠が確認さ

れることから、もう少し範囲を広げて検討すべき問題ではないかとも思われる。」（大石 1998）とし、さらに「蝶足部分の意匠などから考えると、日本本土よりもむしろ中国大陸方面で製作された可能性もあり、今後多方面から検討する必要があると思われます。」（大石 1999）としている。

また、井形進氏は、福岡県白山遺跡の薩摩塔を紹介した中で、「日本の石塔の中では異色の存在」とし、「塔に彫られた四天王が、全く中国的な装いをしている」ことから、「大陸と関係がある遺物らしい」と述べている（井形 2008）。

一方、鹿児島では、昭和 37 年 7 月 14 日の『南日本新聞』の記事において、薩摩塔が「石材は日本のものでなく、琉球か中国のものと思われる。」と解説されており（南日本新聞社 1962）、同日の『鹿児島新報』記事では、坊津の薩摩塔について「四面にそれぞれ仏像が彫りこんであり、顔づくりや服装などに中国の相が出ている。石も支那の石と言われ坊之津に運ばれてきたものと考えられている。」と解説されている（鹿児島新報社 1962）。また、川越政則氏は、昭和 37 年の『南日本風土記』の中で、「中国風の服装をした像が刻まれており、石材も琉球か中国のものらしい」と述べ（川越 1962）、昭和 44 年の『鹿児島の美－南日本民芸図説』においては、「坊ノ津と川辺にある薩摩塔も、その石質から海上の道を渡来したものといわれている。」とし、「海上の道を渡来した薩摩塔」というキャプション付きで水元神社の薩摩塔の写真を紹介している（川越 1969）。同年の『坊津町郷土誌』上巻には「仏像形式と石質が本邦のものと形質ともに異ってをり、南方外来文化との交流の上に成立した文化遺品とも考えられ、貴重な文化財である。」（坊津町郷土誌編纂委員会 1969）と記され、同じく同年の『町報ぼうのつ』12 月号（第 162 号）の記事には、「材質は日本のものでなく、琉球か中国のものではないかと推定されている。」（坊津町役場 1969）とあり、薩摩塔の産地を日本国内ではなく琉球や中国にもとめる説が、このころ（昭和 30～40 年代）すでに提唱されていたことがわかる。

写真Ｉは、浙江省産石材の一例である（詳細は採取データ参照）。写真Ｊは当該石材サンプルと坊津輝津館現存の薩摩塔との比較写真である。肉眼観察する限り両者の類似点は多いが、広大な中国大陸には類似した石材産地が他に存在する可能性もあろう。より正確な比較は今後の詳細な科学分析によるほかない。現時点では、薩摩塔の石材が、写真Ｉの浙江省産石材例のような中国産石材である可能性を指摘するにとどめておきたい。

中国大陸には、「屋根（笠）」「仏龕状の意匠を持つ塔身」「須弥壇（須弥座）状の中台・軸・基礎部」等を組み合わせた、写真Ｋの福建省泉州市開元寺の石塔や、写真Ｌ（浙江省文物局 2004）の浙江省寧波市天童寺の石塔、写真Ｍ（浙江省文物局 2004）の同省麗水市霊鷲（灵鹫）寺石塔のようなグループの石塔がみられる。中国には、これらに類する石塔群中で、薩摩塔のルーツに位置付けられるような、龕中に仏像を浮彫した壷（瓶）形の塔身を持ち、須弥壇の上部（中台部分）に高欄意匠を施し、その下に四天王を浮彫するタイプの石塔が、小グループとして存在するのではないだろうか。薩摩塔のルーツ解明に向け、中国における上記のような意匠を持つ石塔の確認が期待されよう。

なお、大陸から日本への搬入石製品に関しては、木と石を組み合わせた「木石碇」に使用された「碇石」の研究等も進められており、形態や石材等から、北部九州に多い「赭色凝灰岩」「赭色凝灰質砂岩」の碇石が寧波からもたらされた可能性なども指摘されている（小川 2008）。薩摩塔のルーツとの関連という意味でも、上記碇石の産地に関する今後の研究の進展が注目される。

5. まとめ

本稿では、鹿児島県内の薩摩塔を中心に、その来歴や研究史、薩摩塔の産地等について述べ、主と

して次の①～⑥の点を指摘した。

①鹿児島県内の薩摩塔の来歴には不明な点が多く、坊津現存の薩摩塔の「もと一乗院所在」という点などについても、伝承の域を出ない。
②薩摩塔の命名者は齋藤彦松氏で、少なくとも昭和36年にはその名が一般に認知されるようになったと考えられる。
③薩摩塔は、その命名以前は「特殊仏塔」等の名で呼ばれ、齋藤彦松氏による薩摩塔の初期研究は、少なくとも昭和33年7月までさかのぼる。
④薩摩塔の産地を琉球あるいは中国にもとめる説は、中国風の意匠や石質などから、昭和30～40年代にはすでに提唱されていた。
⑤薩摩塔の石材が、写真Ｉの浙江省産石材例のような中国産石材である可能性がある。
⑥中国でみられる、「屋根（笠）」「仏龕状の意匠を持つ塔身」「須弥壇（須弥座）状の中台・軸・基礎部」等を組み合わせた写真Ｋ・写真Ｌ・写真Ｍ等に類する石塔の一群中において、薩摩塔のルーツに位置付けられるような、龕中に仏像を浮彫した壷（瓶）形の塔身を持ち、須弥壇の上部（中台部分）に高欄意匠を施し、その下に四天王を浮彫するタイプの石塔が小グループとして存在する可能性がある。

以上、研究史の整理や可能性の指摘等に終始したが、薩摩塔をめぐる諸問題解明の一助となれば幸いである。今後、一層の薩摩塔研究の進展に期待したい。

引用・主要参考文献等

井形 進 2008　「白山遺跡の薩摩塔」『九歴だより』№27　九州歴史資料館
大石一久 1998　「中世の石造美術」『平戸市史』民俗編　平戸市
大石一久 1999　『石が語る中世の社会』ろうきんブックレット9　長崎県労働金庫
小川光彦 2008　「海域アジアの碇石航路誌」『モノから見た海域アジア史－モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流－』九大アジア叢書11　(財)九州大学出版会
鹿児島新報社 1962　「一乗院石塔　県文化財指定候補」(シリーズ「郷土の重要文化財」④)『鹿児島新報』(昭和37年7月14日)
川越政則 1962　「海上の道を渡来した神々」『南日本風土記』　至文社
川越政則 1969　「異邦の塔」『鹿児島の美－南日本民芸図説』　鹿児島民芸館
川辺町教育委員会 1959　『清水磨崖佛文化財指定申請書類』　※南九州市教育委員会所蔵資料
川辺町教育委員会 1964　『清水磨崖仏群』
川辺町教育委員会 1970　『川辺町文化財一覧表』
川辺町教育委員会 1978　『川辺町教育委員会告示』第9号
川辺町郷土史編集委員会 1976　『川辺町郷土史』全一巻　川辺町
川辺町役場 1961　「これも貴重な文化財－神殿虎御前の墓－」『広報かわなべ』1月号（第39号）
黒田清光 1974　「解説 南九州の石塔について」『川内市史』石塔編　鹿児島県川内市
河野治雄・内原三郎 1982　「古石塔調査カード 調査例1」『南九州の石塔』第3号　南九州古石塔研究会
齋藤彦松 1958　『造形史学手記』第十九冊　※南九州市教育委員会所蔵資料
齋藤彦松 1981　「南九州の塔婆と大日信仰」『南九州の石塔』第2号　南九州古石塔研究会

齋藤彦松 1986　『薩摩塔資料集』　※南九州市教育委員会所蔵資料
齋藤彦松　年未詳（ネガフィルム整理帳）『ネガ』№.3　※南九州市教育委員会所蔵資料
齋藤彦松　年未詳（ネガフィルム整理帳）『ネガ』第 4 冊　※南九州市教育委員会所蔵資料
浙江省文物局 2004　『意匠生輝』(『意匠生辉』)　浙江人民美术出版社
多田隈豊秋 1975　『九州の石塔』上巻　財団法人西日本文化協会
多田隈豊秋 1978　『九州の石塔』下巻　財団法人西日本文化協会
坊津町教育委員会 1962　『坊津町文化財審議会資料』　※南さつま市教育委員会所蔵資料
坊津町郷土誌編纂委員会 1969　『坊津町郷土誌』上巻　坊津町
坊津町役場 1969　「薩摩塔」（シリーズ「郷土の文化財」）『町報ぼうのつ』12 月号（第 162 号）
毎日新聞社 1961　「薩摩塔の名で町文化財に　川辺町の三つの特殊仏塔」『毎日新聞』鹿児島版（昭和 36 年 11 月 20 日）
麻 承照・謝 国旗 2003　『東銭湖石刻』(『东钱湖石刻』)　中国文联出版社
南日本新聞社 1961　「川辺町虎御前の墓　貴重な文化財として調査」『南日本新聞』（昭和 36 年 2 月 3 日）
南日本新聞社 1962　「薩摩塔」（シリーズ「鹿県文化財展から」）『南日本新聞』（昭和 37 年 7 月 14 日）

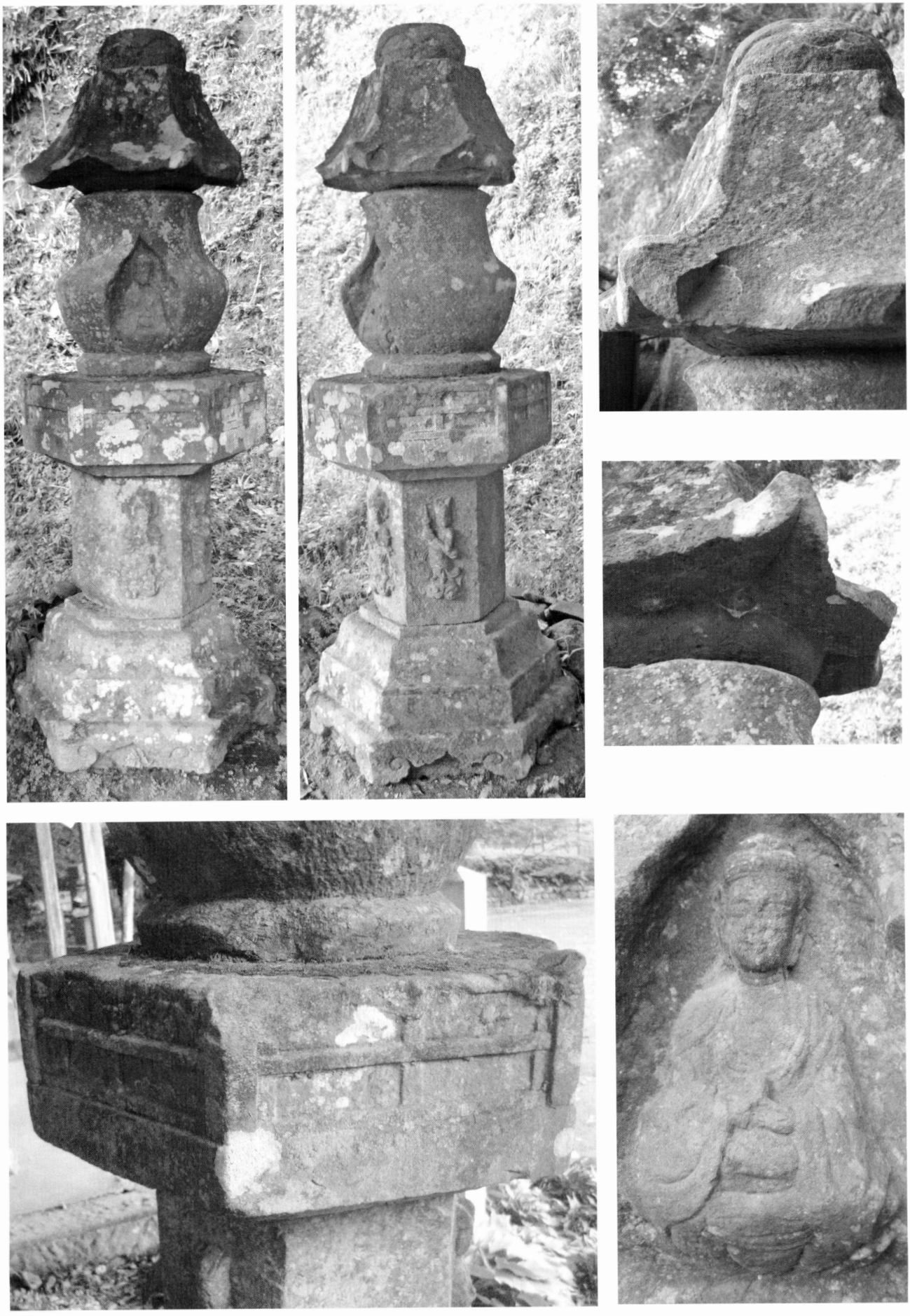
謝辞

本稿作成にあたり、次の方々から御協力・御教示を頂きました。特に、松田朝由氏には、ひとかたならぬ御協力・御教示を賜りました。文末ながら記して感謝します（五十音順・敬称略）。

青木光一・雨宮瑞生・井形 進・上田 耕・上東克彦・大石一久・鹿児島県立図書館・佐藤順二・新地浩一郎・毎日新聞西部本社調査相談室・松田朝由・南九州市教育委員会・南さつま市教育委員会・宮下喜男・若松重弘

関連文献資料等一覧（昭和 33 年～昭和 44 年）

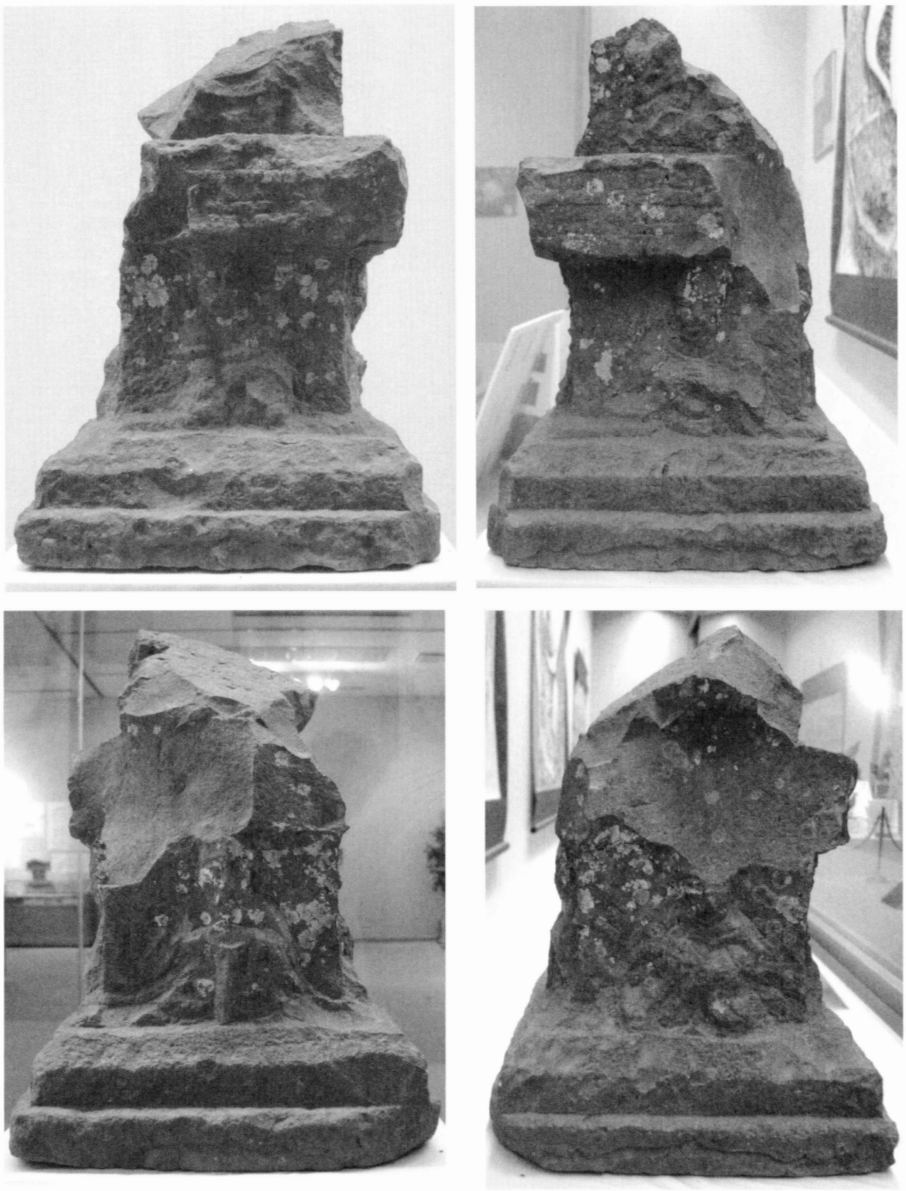
年月日	資料名	著者等	記載概要
昭和 33 年 (1958) 7 月 10 日 ～7 月 11 日	斉藤彦松調査メモノート 『造形史学手記』第十九冊	齋藤彦松	◎齋藤彦松、昭和 33 年 7 月 10 日に川辺を調査。 ◎齋藤彦松、昭和 33 年 7 月 11 日に坊津を調査。 ◎坊津の薩摩塔のラフスケッチ（昭和 33 年 7 月 11 日）。 ◎「薩摩塔」の用語記載無し。 ◎川辺の薩摩塔については記載無し。
昭和 34 年 (1959)	『清水磨崖佛 文化財指定申請書類』	川辺町 教育委員会	◎齋藤彦松・築地健吉・樺山寛、昭和 33 年 7 月 10 日に清水磨崖仏を調査。
昭和 36 年 (1961) 1 月 1 日	『広報かわなべ』1 月号 （第 39 号）記事 「これも貴重な文化財－神殿虎御前の墓－」	川辺町役場	◎川辺町神殿の薩摩塔（虎御前供養塔）の写真を掲載。 ◎坊津の「石刻仏塔」と同形態。 ◎川辺の他の 2 塔については記載無し。 ◎「薩摩塔」の用語記載無し。
昭和 36 年 (1961) 2 月 3 日	『南日本新聞』記事 「川辺町虎御前の墓　貴重な文化財として調査」	南日本新聞社	◎川辺町神殿の薩摩塔（虎御前供養塔）の写真を掲載。 ◎坊津の「石刻仏塔」と同形態。 ◎「町教委は考古学の京都大谷大斎藤教授に資料をおくって鑑定を依頼したが、国内にも類例のない貴重な特殊仏塔であるとの回答があった」と記載。 ◎川辺の他の 2 塔については記載無し。 ◎「薩摩塔」の用語記載無し。
昭和 36 年 (1961) 11 月 20 日	『毎日新聞』鹿児島版記事 「“薩摩塔”の名で町文化財に　川辺町の三つの特殊仏塔」	毎日新聞社	◎川辺町水元神社の薩摩塔（整備後の状況）の写真を掲載。 ◎「川辺町教委では町内にある三つの特殊仏塔の考証につとめていたが、いずれも鎌倉中後期から室町時代にかけてのものとわかり、近く“薩摩塔”の名で町文化財として保護することになった。」と記載。 ◎「坊津町一乗院跡の仏塔と同一形式のもの。京都大谷大学の斎藤彦松教授はこれら三つの塔を“薩摩塔”と名づけ、仏教美術上、貴重な資料として保存することを町教委にすすめており、同教委でも町文化財指定の準備をすすめている。」と記載。
昭和 37 年 (1962) 7 月 14 日	『南日本新聞』記事 「薩摩塔」 （シリーズ「鹿県文化財展から」）	南日本新聞社	◎坊津の薩摩塔の写真を掲載。 ◎「室町時代の作といわれる。」と記載。 ◎「坊津一乗院の庭にあったもの。その後川辺町に同型のものが三個発見されている。」と記載。 ◎「石材は日本のものでなく、琉球か中国のものと思われる。」と記載。 ◎「ユニークな形は薩摩にしかないところから斎藤博士が薩摩塔と名づけた。」と記載。
昭和 37 年 (1962) 7 月 14 日	『鹿児島新報』記事 「一乗院石塔　県文化財指定候補」 （シリーズ「郷土の重要文化財」④）	鹿児島新報社	◎坊津の薩摩塔の写真を掲載。 ◎「さつま塔」の用語記載有り。 ◎「四面にそれぞれ仏像が彫りこんであり、顔づくりや服装などに中国の相が出ている。石も支那の石と言われ坊之津に運ばれてきたものと考えられている。」と記載。
昭和 37 年 (1962) 9 月 15 日	『南日本風土記』 「海上の道を渡来した神々」	川越政則	◎坊津の薩摩塔の写真を掲載。 ◎「中国風の服装をした像が刻まれており、石材も琉球か中国のものらしい。」と記載。 ◎「薩摩塔」の用語記載有り。 ◎「川辺町でも三個発見されている。」と記載。
昭和 37 年 (1962) 10 月 27 日	『坊津町文化財審議会資料』	坊津町 教育委員会	◎「薩摩塔」の用語記載有り。
昭和 39 年 (1964) 3 月 31 日	『清水磨崖仏群』	川辺町 教育委員会	◎齋藤彦松・築地健吉・樺山寛、昭和 33 年 7 月 10 日に清水磨崖仏を調査。 ◎川辺の薩摩塔 3 基、坊津の薩摩塔についても記載有り。 ◎川辺町水元神社の薩摩塔の写真を掲載（整備前の写真含む）。
昭和 44 年 (1969) 6 月 20 日	『鹿児島の美－南日本民芸図説』 「異邦の塔」	川越政則	◎「坊ノ津と川辺にある薩摩塔も、その石質から海上の道を渡来したものといわれている。」と記載。 ◎「海上の道を渡来した薩摩塔」というキャプション付きで水元神社の薩摩塔の写真を掲載。
昭和 44 年 (1969) 12 月 15 日	『坊津町郷土誌』上巻	坊津町郷土誌 編纂委員会	◎坊津の薩摩塔の写真を掲載。 ◎「仏像形式と石質が本邦のものと形質ともに異ってをり、南方外来文化との交流の上に成立した文化遺品とも考えられ、貴重な文化財である。」と記載。 ◎川辺の薩摩塔 3 基についても記載有り。
昭和 44 年 (1969) 12 月 16 日	『町報ぼうのつ』12 月号 （第 162 号）記事 「薩摩塔」 （シリーズ「郷土の文化財」）	坊津町役場	◎坊津の薩摩塔の写真を掲載。 ◎「材質は日本のものでなく、琉球か中国のものではないかと推定されている。」と記載。 ◎川辺の薩摩塔 3 基についても記載有り。



写真Ａ 南九州市川辺町水元神社現存の薩摩塔

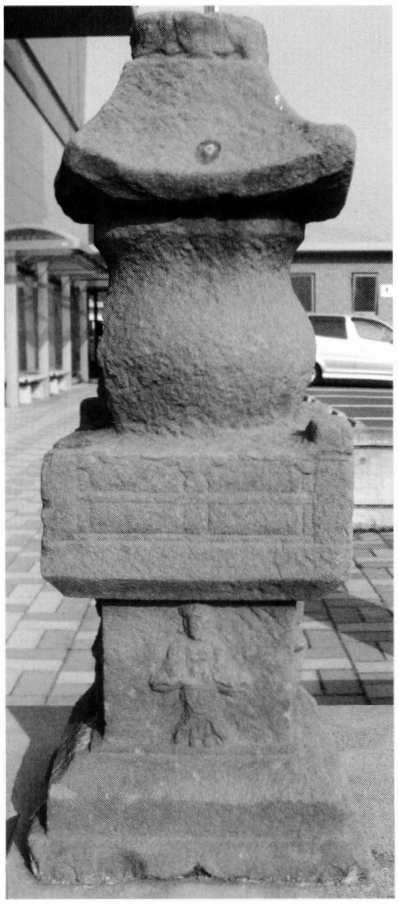
写真Ｂ　南九州市川辺町水元神社現存の薩摩塔

写真C　南九州市川辺町神殿現存の薩摩塔

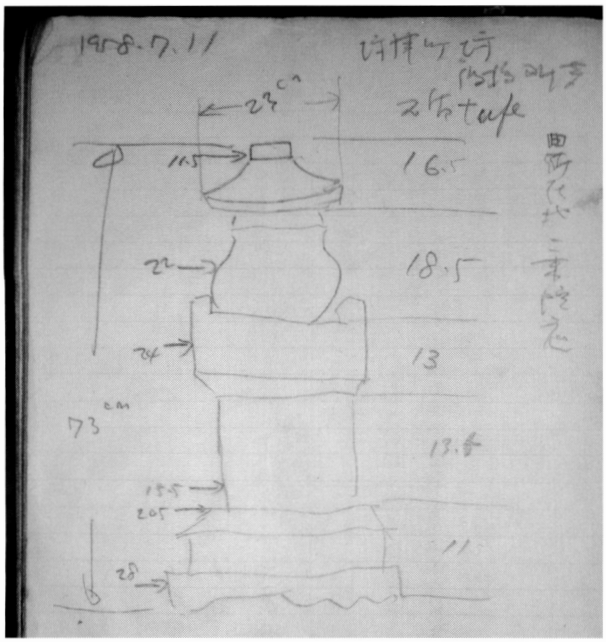


写真Ｄ　南九州市川辺町諏訪運動公園現存の薩摩塔

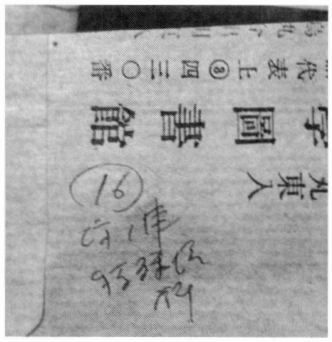
写真Ｅ　霧島市隼人町沢家墓地現存の薩摩塔



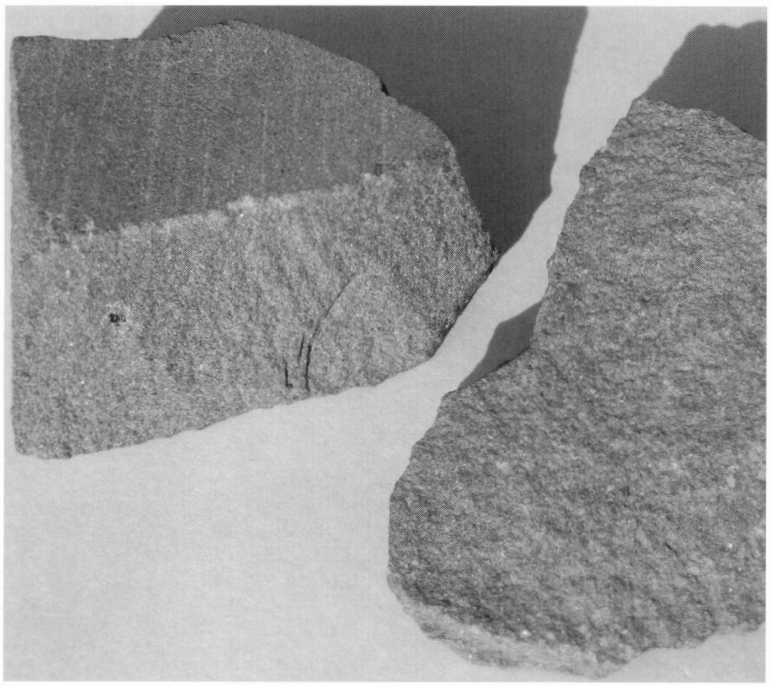
写真Ｆ　南さつま市坊津町坊津歴史資料センター輝津館現存の薩摩塔



写真Ｇ 齋藤彦松氏の調査メモノート『造形史学手記』第十九冊（齋藤 1958）に描かれた坊津の薩摩塔



写真Ｈ 齋藤彦松氏のネガフィルム整理帳『ネガ』No.3 の坊津薩摩塔ネガフィルムと「坊ノ津特殊塔」のメモ書き



写真Ｉ 浙江省産石材の一例

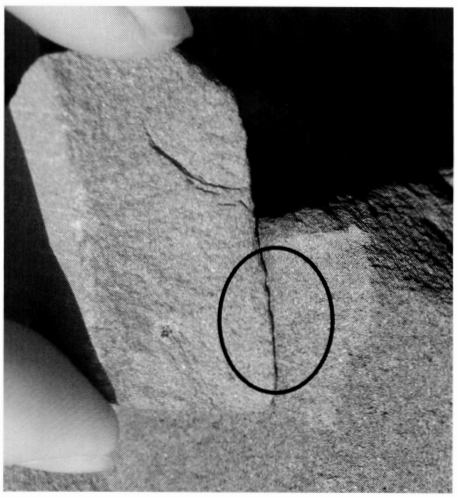
採取データ

【採取日時】2005 年 11 月 4 日（金）

【採取場所】中国浙江省寧波市
鄞州区梅錫村華興塘の採石場
（採石場の管理者の許可を得て採取）

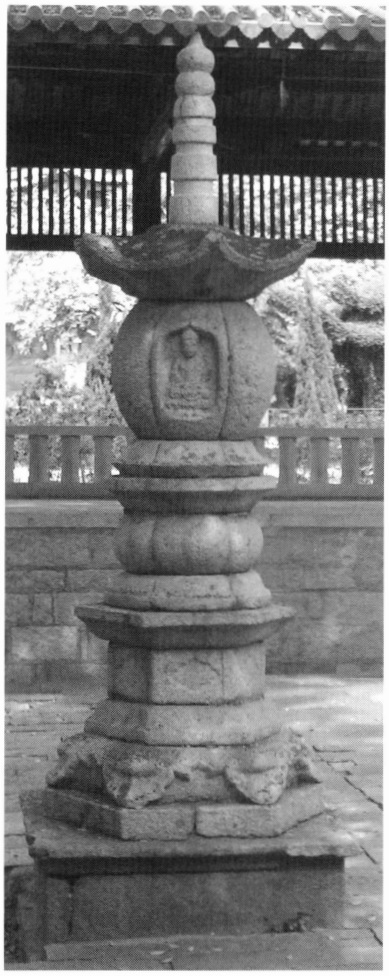
【石材名称】梅園石

【採取者】高津孝（鹿児島大学法文学部）

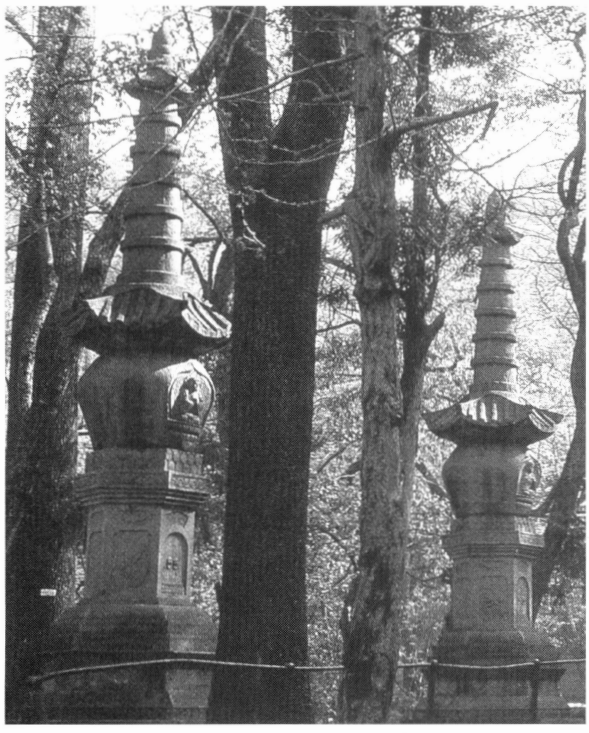


↓拡大

写真Ｊ 浙江省産石材と薩摩塔



写真K 福建省泉州市開元寺の石塔



写真L 浙江省寧波市天童寺の石塔

写真M 浙江省麗水市霊鷲(灵鹫)寺石塔

※写真L・M引用：浙江省文物局 2004 『意匠生輝』(『意匠生辉』) 浙江人民美术出版社より